日常を支えたい　心理士のお仕事

こどもとおやの相談室

みなさん、こんにちは。こども病院に心理士がいるのをご存知でしょうか？

こども病院では６人の心理士が働いています。主治医から依頼が出ましたら、みなさんと初めてお会いすることになります。

外来では、全ての科に対応して検査や相談を行っています。たとえば、治療のひとつの指標として、または考える力の得意・不得意を知ることが治療に役立つ時などに主治医から依頼があり、１時間ほどかけて課題を行って頂くことがあります。精神科と連携し、絵を描いたり、質問に答えてもらい、今どのような心の状態なのかヒントを得ることもあります。検査や相談が、これからの過ごし方や学習の工夫などにつながるよう、主治医と連携しながら、こどもやご家族にとって少しでもプラスとなるように取り組みたいと思っています。

病棟では、長期に入院しているこどもと一緒に遊んだり、おしゃべりをすることが仕事のひとつです。予期せぬ入院、長期の治療はこどもにとっても、ご家族にとってもとても大きな出来事です。今まで経験したことのない不安やつらい思いの中、「仲間がいるんだ」「病気になったけれど、治して戻るんだ」「病気になっても自分は自分なんだ」と感じてもらえるよう、こどもがこどもらしさを発揮できるよう、遊びやおしゃべりを通してお手伝いしたいと思っています。こどもたちからは「何の仕事してるん？」「仕事せんでもええん？」と聞かれるので、「遊んでばっかりで楽しそうやなあ」と思われているみたいです。こどもたちと過ごす時間は私どもにとってもとても大切な時間ですので、一緒に遊ぶ仲間として、この言葉はほめ言葉だと嬉しく思っています。

こどもやご家族にとって日常が一番大切であるということを忘れず、その日常にどう寄り添えるのかを考えたいと思っています。これからもどうぞよろしくお願い致します。

Concept　コンセプト

●基本理念　周産期・小児医療の総合施設として、母とこどもの高度専門医療を通じて、親と地域社会と一体になってこどもたちの健やかな成長を目指します。

●基本方針
1. 患者の権利を尊重した医療の実践
2. 安全・安心と信頼の医療の遂行
3. 高度に専門化されたチーム医療の推進
4. 地域の医療・保健・福祉・教育機関との連携
5. 親とこどもが一体となった治療の推進
6. こどもへの愛とまことに満ちた医療人の育成
7. 医療ボランティアとの協調による患者サービスの向上
8. 継続的な高度専門医療提供のための経営の効率化

編集後記

今号が発行される頃には夏休みに入っていると思います、昨年は酷暑でしたが今年はどうでしょうか。これから最終ページでは医療専門職の仕事を紹介していきます。今号は臨床心理士です。記事のご要望等があればお寄せ下さい。

委　員　長：大津雅秀
副委員長：松本奈美
委　　員：深江登志子　西森玲治
貝藤裕史　染谷真紀
河本和泉　笠木憲一
井口秀子　橋本恵美
時　克志　礒元啓吾
森　泰隆　辛　浩一

本誌に関するご感想・ご希望・ご質問はこちらまで

兵庫県立こども病院
HYOGO PREFECTURAL KOBE CHILDREN'S HOSPITAL
〒650-0047
神戸市中央区港島南町１丁目６-７
TEL. 078-945-7300
FAX. 078-302-1023
http://www.hyogo-kodomo-hosp.com/
e-mail:info_kch@hp.pref.hyogo.jp

01病P2-011A4

げんきカエル No.66

兵庫県立こども病院ニュースレター

令和元年（2019）　8月1日

代謝内分泌科 科長就任にあたって

2019年４月１日付けで代謝内分泌科科長を拝命致しました尾﨑佳代です。2002年より当院職員として勤務して参りました。前任の郷司克己先生は、30年にわたり兵庫県の小児内分泌医療を牽引してこられました。その後を引き継ぐ重責で身が引き締まる思いです。

代謝内分泌科の扱う疾患としては、主に低身長、甲状腺疾患、思春期に関わる疾患並びに糖尿病ですが、少数ながら重要な疾患も多くあります。下垂体に関わる疾患は主に脳外科、血液腫瘍科の先生方と、くる病はO脚で発見されるため、整形外科の先生方と、新生児期に発症する先天性副腎過形成は新生児科の先生方と、性分化疾患は泌尿器科の先生方と、最近では2017年11月30日にヌーナン症候群の成長ホルモン治療が開始され、遺伝科、循環器科の先生方と協力しながら診断及び治療を行っております。この様に他科とのスムーズな連携が欠かせない疾患が、今後ますます増えていくと予想されます。兵庫県立こども病院は各科専門家を備えて活動を行っていますので、各科専門家の先生方と密に連携を取りながらスムーズに診療を行えるように努力して参ります。

また、小児内分泌専門医の育成も大きな課題です。兵庫県下ではその専門医が少なく、他の専門家の先生方が診療を行っている病院も多くあります。若手小児内分泌科医の育成を通じて地域医療に貢献することも、当科に課せられた大きな使命です。

今後の当科の方針として、今まで当科が担ってきた分野をさらに充実させていきたいと思います。内分泌分野の早期診断と標準治療から最先端医療、さらには在宅医療に至るまで、すべての患者様によりよい医療を提供できるように努めていきたいと思います。兵庫県下の皆様、医療機関の先生方のお役に立てるように最善を尽くす所存です。ご指導、ご鞭撻を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

患者手記「うまれてきてくれてありがとう」

福島　淳子（母）

2016年９月に４人目を妊娠しました。３人目のお産で体力の限界を感じていたので、それから８年あいたお産は大丈夫かなと少し不安に思っていました。

胎内記憶の池川明さんの『笑うお産』という本に出会い、「赤ちゃんがママを選んで産まれてくる。ママが自由になって普段から我慢をためず楽にしていれば、赤ちゃんに合わせて自然なお産が出来、赤ちゃんへの負担も軽く子育ても楽にできる」と書いてあるのを読み、ちょうど妹も同時期に妊娠していたので一緒に「笑うお産」をしよう！と言いました。

妊娠初期にさくらの首に嚢胞が見つかり染色体異常を疑われましたが、私は自然体で産みたかったので敢えて検査はせず、オーガニックでおいしいものを食べたり母体を休めたり、上の子たちと４人目にして初の女の子の誕生を楽しみに過ごしました。

2017年４月。陣痛が来て病院へ。いよいよ笑うお産の時。妹は２日前に笑うお産を成功させていたので自分もきっといいお産ができる。パパや助産師さんの協力もあり大満足のお産ができました。

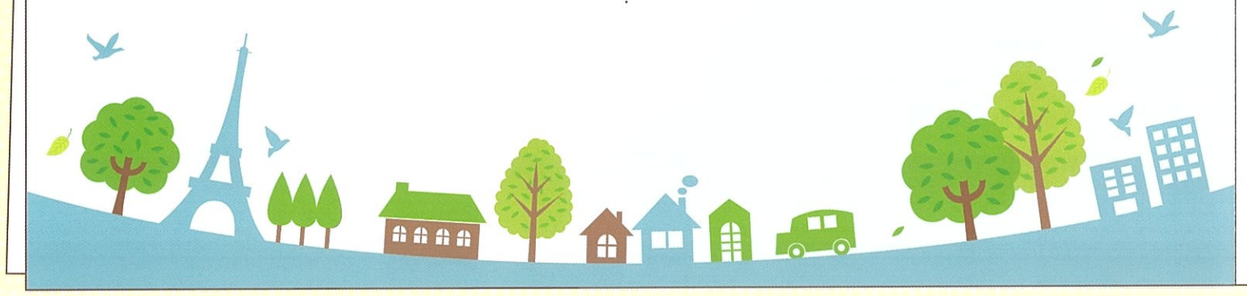
ふーっと安堵に包まれているとさくらの酸素の量を測るモニターの警戒音が止まずバタバタと赤ちゃんが処置室に連れていかれ、しばらくたってさくらにやっと会えた時は全身に点滴や酸素チューブなどいっぱいついていてさすがに辛かったです。即、地域の救急病院に搬送され、心臓手術をするためにこども病院へ搬送されました。

私は退院してすぐにパパとこども病院へさくらのお見舞いに行きました。さくらは広いNICUの部屋にいてとっても小さくてかわいかった。よく寝る子でいつお見舞いに行っても寝ていました。お医者さんや看護師さんたちがさくらをとってもかわいがってくださり、ダウン症と聞いたときは不思議と嬉しくて、周囲もエンジェルベイビー（癒しの子）と言ってくれて癒されました。

２か月でシャント手術。手術中はとても心配でしたがお医者さんたちの技術力はすごくて感謝があふれました。主治医のお医者さんがさくらを見るたびに「かわいい、かわいい！」と言って下さり、難しそうな手術も「僕がするから大丈夫です！」とはっきりいってくださって心から救っていただき感謝の気持ちでいっぱいです。看護師さんたちも色々なことを教えてくださり愛情をかけていただき、入院の日々はいまでも良き思い出です。

あれから２年。さくらは２歳。ずり這いでいろんなところに移動してちょっぴりやんちゃ者。お兄ちゃんたちと楽しく暮らしています。家族はもちろん、たくさんの人たちを癒してみんなを優しい気持ちにさせてくれます。

さくら、うまれてきてくれて本当にありがとう！



医療の質と安全の向上をめざして
ー こども病院は今年度病院機能評価の認定を受けました ー

副院長
前田　貢作

2016年の新病院への移転に伴い、設備、機能、組織等が大きく変化した当院では、病院全体として新たな運営上の課題を抱えることとなりました。移転から1年が経過した頃から、これらの課題を解決するための方策を模索してきました。こども病院の医療機能やサービス等について第三者機関から評価を受けることで、院内の各種ルールや手順を見直し、医療の安全の確保と質の向上を図る必要があるのではという声があがりました。

この時点でこども病院の抱えていた課題としては

▶ 新しい職員が多数増えたため、各種ルールの周知が不十分な状況となっている。
▶ 手順やマニュアルが新病院の機能・運営に則したものとなっていない。
▶ 手順やマニュアルが遵守されていないことによるヒヤリハット事例が発生している。

などでした。

そこで2018年度内の受審を目標に、2017年10月に病院機能評価を受審する旨の決定がなされ、院内でその準備を進めることになりました。

病院機能評価とは

医療の質と安全の向上を目的として、一定の基準に基づき、中立の立場から医療施設を評価したものです。いわば宿泊施設などの防火対象物適合表示制度「適マーク」の様なものです。

病院機能評価は、我が国の病院を対象に、組織全体の運営管理および提供される医療について、第三者機構となる公益財団法人日本医療機能評価機構が中立的、科学的・専門的な見地から評価を行うツールです。国民が安全で安心な医療が受けられるよう、以下の評価対象領域から構成される評価項目を用いて、病院組織全体の運営管理および提供される医療について評価されます。

「患者中心の医療の推進」「良質な医療の実践」
「理念達成に向けた組織運営」

現在全国8389病院のうち認定病院数は2181（26.0%）となっています。また当院の様な小児専門病院では約半数が認定されています。

最新の評価領域として、「病院組織の運営と地域における役割」「患者の権利と医療の質および安全の確保」「療養環境と患者サービス」「医療提供の組織と運営」「医療の質と安全のためのケアプロセス」「病院運営管理の合理性」が提示されています。私たちは他者の客観的な視点で審査される機会を持つことで、その準備をする過程で病院の組織や運営上の要改善点が明らかになることや、職員の一体感が生まれるといったメリットがあると考えました。

私たちは2017年11月に病院全職員に向けて病院機能評価についての説明会を開催し、12月には第１回の病院機能評価受審準備委員会を発足させ、院内のすべての職種を巻き込んだ対応を開始しました。

以後毎月1回、受審準備委員会を開催しました。委員会では審査の際に評価される項目は89項目について準備を行いその進捗状況を確認しました。

1）ケアプロセス調査の準備
　ⅰ）調査病棟：周産期母子医療センター
　　小児がん医療センター　各病棟
　ⅱ）各病棟において、カルテを選定し、説明者を決めていきました。
2）マニュアル類点検の準備
　全領域毎の評価項目別に手順やマニュアルを整備しました。

院内の各種委員会では議事録の整備を行いました。これらの業務をほぼ1年かけて行い、審査の日に備えました。

実際の訪問審査は2018年12月に行われました。５名のサーベイヤー（医師２名、看護師２名、事務１名）が機構より来られました。

当日の訪問審査の概要は、

① 書類確認　◇ マニュアル類、要項、規程など
② 面接調査　◇ 病院幹部対象の面接
③ 病棟概要確認～ケアプロセス調査　４病棟の現場とカルテの調査
④ 事務面接・部署訪問　◇ 対象は事務部門
⑤ 外来訪問：外来部門の訪問
⑥ 部署訪問：院内のすべての部署への訪問
⑦ 合議会議　◇ サーベイヤー間での協議
⑧ 講評および意見交換

以上の審査がみっちり２日間にわたり行われました。

2019年４月５日、病院機能評価の審査結果連絡を公益財団法人日本医療機能評価機構より受けました。結果は、いずれの領域でも良好な審査結果が得られ、一般病院２に認定され、改善要望事項はなしとのことでした。

私たちはこの評価をはじめの一歩と捉えています。さらなる医療の質と安全の向上をめざして、たゆまない努力を続けていきたいと考えています。皆様方のさらなるご援助とご指導をいただき、日本一の小児病院を目指して精進していきます。よろしくお願いします。